

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成20年11月 第93号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

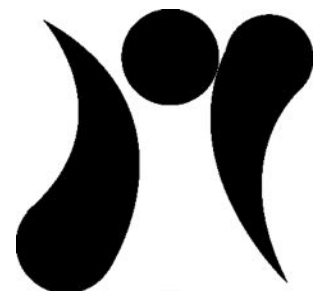
## リスクに備える生活の創造 命をつなぐ調理と食材そして地域

農薬やカビに汚染された事故米が食用として不正に転売された事件で、一部が老人ホームの給食にも使用されていました。最近、コスト削減や業務効率化の手始めとして、調理業務を外部委託するホームが増えています。入札により最も安い費用を提示した給食業者に委託するのが一般的であり、業者が給食材料費を切り詰める為に安い食材を求める過程で事故米が混入した、と推測されます。また、輸入の冷凍食品の使用も一般化しており、その中には高濃度の農薬が残留している場合が数多く指摘されています。日本産の農産物の中にも生産者が、出荷する商品と自家消費する食品とを区別して、農薬を使用しているとの話をよく聞きます。また、肉・野菜・魚などの産地偽装も近年、盛んに発覚しています。生命の源である食材について、何を信用すればよいのか、疑問だらけの世の中になってしまったようです。

老人ホームでの暮らしと介護には、運命としての『老いと死』を如何に受け止め、如何に生きるか、其処では何が大切か、といった課題が日々突きつけられています。その暮らしの中で、命をつなぐのが食事であり食材です。そしてお年寄りには、食べる事が出来なくなる時、自然の摂理として死を迎えます。

そこでは、食事は最も重要な生活行為であり、調理はそれを支える最も基本の介護業務です。『死』という事に直結する調理と食材であるからこそ、介護者として、介護事業者として、調理業務と食材調達を大切にしたい、と考えています。

(次ページにつづく)



せいりょう園 渋谷 哲

(前ページのつづき)

お年寄りが暮らす場で、食べる人の顔を見ながら調理業務を行う事。お年寄りご本人にも調理の時間と空間を共有して貰い、食べるという自らの生活意欲に結びつけて頂く事。この2つを大切にして、調理を介護の最も主要な業務の一つと位置づけたいと思っています。

排泄・入浴・食事の3大介護に加えて、命と暮らしの原点とも言える調理や、生きるに相応しい生活環境を整える掃除や洗濯も、同等の介護業務として捉えるべきとも考えます。

今各地で、地域の活性化に向けて『地産地消』という事が提唱され、地元で作った商品を地元で消費して、地域の農業を活性化しよう、という取り組みが始まっています。我々も公的な社会システムの一部を担う介護事業者として、コストの削減や業務の効率化を図る事以上に、地域社会に貢献する事が大切だと考えます。

年金の給付額が年間40数兆円、介護保険の給付額が年間約7兆円となっている現在、お年寄りの生活費用や介護施設の運営費が、地域社会の有力な活力源となる途を探る事は、介護事業者の社会的な責務でもある、と考えます。要介護のお年よりの暮らしが、そして人生を完結する場としての介護施設が、地域社会を活性化する為の第一歩として、地域での食材の調達を大切にしたい、と考えます。


地域の中で生産と消費が直結し、お互いの顔が見える仕組みの中で、生産者や流通業者を信頼し、安心して食材を調達したい、と願います。介護事業が地域に密着するサービスとして位置づけられる現在、その利用者が地元農産品の消費の主役となって、地域の活性化に寄与する仕組みを創り、要介護高齢者が増える事が、地域社会の負担を増やすばかりではなく、地域社会を活性化する原動力になる途を開きたい、と願います。

今、地球規模で天候が不順になり大きな災害が起きています。世界各地で紛争が起き、世界同時に金融不安や不況が起き、石油も食糧も不安定です。国境や人種を超えたグローバルな関係性を持つ暮らしが実現する一方で、一人の高齢者が最期を迎える暮らしにはローカルな課題があり、個人の思想と個人的な関係性、地域社会の持つ豊かな生活環境が強く求められてきます。

高齢者の暮らしや施設の運営にとっては、生活圏内での安定した食品供給源の確保が、安定した生活の基盤であり、国内や地域毎の自給率の向上が不可欠なのではないか、と強く感じるこの頃です。人生を終える場での調理業務であるからこそ、安全な食材を安定的に仕入れて調理し、地域社会の多くの皆様方とも協力し合いながら、人生が完結する喜びを分かち合いたい、と心より願っています。



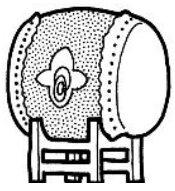
\*\*\* せいよう園 11月の行事 \*\*\*

11月 1日(土) 園長との懇談	11月 20日(木) 童謡・唱歌の集い観賞
11月 5日(水) 誕生会	(野口公民館にて)
11月 7日(金) ひよひ手芸教室	11月 21日(金) 播磨学園奉仕活動
11月 10日(月) 仏教講話	ひよひ手芸教室 
11月 11日(火) 昼食会(お好み焼)	11月 24日(月) 理容の日
11月 14日(金) 体操教室	11月 26日(水) 郷土料理の日(石狩鍋)
11月 17日(月) 美容の日	11月 28日(金) 介護者の集い
11月 19日(水) レントゲン撮影	~テーマ 介護保険のおさらい~

10月の行事より  
10月22日~運動会~



大玉転がしは力を合わせて押します。  
玉入れは思いきり反則してしまいました。  
やっと玉が入った...



- 演目
- 1 あいさつ 選手宣誓
  - 2 ラジオ体操
  - 3 エンゼル保育園
  - 4 大玉転がし
  - 5 玉入れ
  - 6 パン食い競争
  - 7 みんなで 炭鉾節



一番の楽しみはパン食い競争!  
パンつかみ競争になってしまいました。



お昼のお弁当も楽しみの1つです。  
いつもと違う雰囲気にもすすみます

## 認知症サポーター養成講座を開いて

地域支援センターのぐち南  
吉田 知一

今年の夏にせいりょう園では、「認知症サポーター養成講座」を開催しました。認知症サポーター養成講座とは、認知症の人と家族への応援者である認知症サポーターを養成する講座です。講座を修了すると、認知症を支援するサポーターの「目印」として、オレンジ色のブレスレット「オレンジリング」が渡されます。自治体を中心となって、このサポーターを全国で100万人養成し、認知症になっても安心して暮らすことの出来るまちづくりを目指しています。今回、加古川市社会福祉協議会との共催で地域住民の方々、ボランティアセンターのボランティアにも声をかけ、114名の参加者がありました。

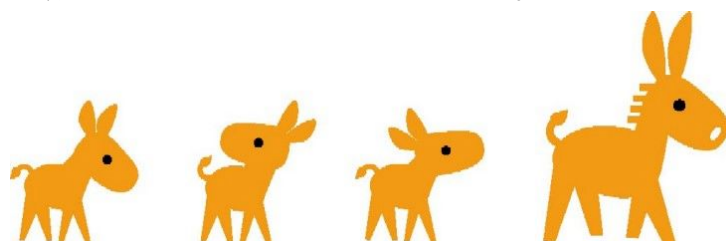


この認知症サポーターに講座を通して伝えたいことは、認知症という病気になっても、私たちと同じ権利と責任を持つ人間であるということをサポートして欲しいということです。サポーターには特別なことは求めません。私たちと同じように外出し、買い物をして、人と接することを当たり前の権利として、サポートして欲しいのです。認知症であるということを受け入れ、ただ見守ってもらいたいのです。

「ただ見守る」ということが実は一番難しく、どうしても「転ばぬ先の杖」をつきたくなくなってしまいます。徘徊して転んでしまうのではないかと心配してしまいます。しかし、よく考えてみると、徘徊することで本人が困っているのではなく、我々が、様々なリスクに対して過剰に心配し、困っていることのほうが多いように思います。転ばないように未然に防ぐことのほうが我々にとっては楽なことなのです。そうなった場合、本人から力を奪い、やさしさが監視の目となり、認知症の方や障害を持つ方を地域から排除してしまうような動きになってしまいます。住み慣れた場所で最期まで生活できるようにサポートしていただきたいのが、この認知症サポーターの本当の意味でのサポートであると考えています。

せいりょう園のグループホームでは拘束はしないことになっています。日中は玄関のカギを閉めることはありません。利用者が徘徊され外に出られたとしても止めることはありません。外に出たことを職員が気づくことが出来れば、後ろから

ついていって見守りすることが出来ますが、24時間そばにいる訳ではないので、職員が気づかない内に外出されていることがあります。その場合、施設の周りを探しますが、どうしても見つからない場合は、家族に連絡し警察に捜索願いを出します。捜索の結果、利用者が無事保護された時に警察が我々に言った言葉が「何故、認知症の方を外に出すのですか？」というものでした。決して、私たちの仕事は認知症の方を閉じ込めることではないですし、グループホームはそんな施設ではありません。認知症の方が自由に徘徊することが出来ないのが現実です。「外を自由に歩く」という権利と責任を認められていません。これは私たち介護職員だけでは実現することは出来ません。認知症サポーター皆さんの本当の意味での見守りが必要になってくるのだと思いました。今後も認知症サポーター養成講座を開き、サポーターを増やしていければと思っています。



### ケアハウス等空き情報

<平成20年11月17日現在>

#### ケアハウス

・めぐみ苑	: 1 人部屋 2 室	・アゼリア	: 2 人部屋 2 室
・シスナブ御津	: 1 人部屋 1 室	・青山苑	: 1 人部屋 2 室
・キャッシル真和	: 1 人部屋 1 室		: 2 人部屋 1 室
・あさなぎ	: 1 人部屋 1 室	・保月の郷	: 1 人部屋 1 室
・ウエルソグ はりま	: 1 人部屋 2 室		: 2 人部屋 1 室
・香楽園	: 2 人部屋 1 室	・ネバーランド	: 1 人部屋 1 室

#### グループホーム

・グループホームまどか : 1 人部屋 1 室



[問合先]せいりょう園介護相談室

(079)421-7156/(079)424-3433

### せいりょう園待機者状況

<平成20年11月18日現在>

入所判定済み者 308名 グループの内訳  
 グループ... 118名  
 グループ... 129名  
 グループ... 61名

#### ○入所判定済み者の現在状況

在宅 116名 / 特別養護老人ホーム入所中 5名 / 医療機関入院中 80名  
 老人保健施設入所中 91名 / ケアハウス入居中 5名 / グループホーム入居中 6名  
 辞退その他 : 他施設入所 3名 / 死亡 2名



7月7日の七夕様仏教講話から久しぶりの担当となった。8月はお休み、9月はお寺さんのご都合が悪く開催できず、10月は私用で私が休みをもらった。今回は平岡町高畑にある曹洞宗、長松寺の殿界文明ご住職に来て頂いた。2～3度連絡差し上げたが生憎お留守で、今日が全くの初対面であった。立派な体格と温和な風貌に魅せられ講話の前に話が弾んだ。3時過ぎ、いつもより若干少なめの聴衆ではあったが始めて頂く。

「長松寺と言いますが、松は松くい虫にやられて殆どありません、しかし誇れる銀杏の木があります。樹齢150年、高さは優に30m。昔から村人はオラガ村のシンボルと慕っていました。宗派は曹洞宗、本山は福井県永平寺です。永平寺と言え今年1月、宮崎禅師が108才で亡くなりました。その前に108才のお祝いを計画していたのですが実現できませんでした。ところで108才のお祝いをなんとか知っていますか？77歳は喜寿、88歳は米寿、99歳は白寿ですね。(勿論誰も答えられない) それは茶寿と言います。“茶”は草冠を二十、その下はよーく見ると八十八に分解出来る。合わせて百八。それで『茶寿』。」

ここでご自分のお生まれになった年を昭和25年と紹介され「この頃100歳以上の人口は全国で何人だったと思いますか？」と質問。100人より多いか少ないか？実は97人。では、今は？ — 36,000人だそうです。

次に相田みつをの詩、「自分の番」を紹介される。

『父と母で二人。父と母の両親で四人。その又両親で八人。こうしてかぞえてゆくと十代前で千二十四人。二十代前では・・・？なんと百万人を越すんです。過去無量のいのちのバトンを受けついで、今、ここに自分の番を生きている。それがあなたのいのちです。それがわたしのいのちです。』

「この中の誰一人が欠けても今の自分の存在は無いのです。折角のバトンです。いのちのバトンに加えて、心のバトン(感謝の心、思いやりの心)を添えて次の世代にバトンタッチしたいものですね。」

次にご住職は紙芝居を取り出された。題目は『月のうさぎ』。  
記憶を頼りに・・・

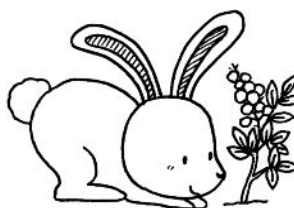
ある所にうさぎ、サル、カワウソ、山犬がいた。うさぎが言った。「これから困っている人がいたら皆で助けよう。」皆も「そうしよう」と仲良く暮らしていた。そんなある日、一人のくたびれた老僧が現れた。「何日も何も食べていない。食物が欲しい。」四匹は早速食物を探しに出かけた。カワウソは川原で魚を見つけた。「誰のですか？」返事が無い。「これは誰かの忘れ物だ。貰って行こう」とお坊さんの所へ持ってきた。山犬は小屋からいい匂いがするので覗いたら肉と牛乳の壺があった。「誰のですか？」返事が無いので貰って来た。サルはマンゴーの果樹園で「誰のですか？」沢山あるから

失敬してきた。さて、うさぎは探し回ったが何も見つからない。疲れて自分の食べ物にもありつけない有様。お坊さんの所へ帰ってきて、「お坊さん、火をおこして下さい。」お坊さんが火をおこし、勢い良くなったところでうさぎは「私はあなたにあげるものは何もありません。私を食べてください」と言って、火の中に飛び込んだ。しかし少しも熱くはない。その瞬間老僧が帝釈天に姿を変えられた。(元の姿に戻られた)

「日頃、お前が言ってた言葉は真実だった。心からのものであることがよく分かった。お前の姿を月に描いてあげよう。」(これで、月でうさぎが餅をついているのが分ったでしょ!!)

物でも心でも喜んで他の人に与え、見返りを求めない。お釈迦様の説かれるお布施の心です。示された色紙には、

飲まずとも 水を供えたい  
食べずとも 美味を供えたい  
見えずとも 花をかざりたい  
答えずとも 語りかけたい  
見返りを求めぬ姿は美しい



聞き手が少人数であったが熱く話され、最後に「皆さんの真剣な、私を見つめる目から私は逆に元気を頂きました。ありがとうございます。きっと茶寿まで元気で頑張ってくださいね。」ありがとうございました。

## 介護者の集い

せいりょう園では毎月1回「介護者の集い」を行っています。平成10年4月から始まり20年11月で128回を迎えます。その間1度も休みなく続けてきました。たくさんの方々にご出席いただき、ここまで継続できたのだと感謝しております。

2~3名の方しか参加していただけないこともありますが、皆様、何か得るものがあるようで楽しみにいらっしやるとの事を聞き、嬉しく思います。

介護保険の話、悪質商法の話、感染症、食事、レクリエーション等その時々で旬の話題を考え、職員間で勉強して臨んでいます。ここ近年は介護予防が重視され、あちこちでいろんな取り組みをされています。予防は大切ですが、防ぐことの出来ない老いに向き合っていく為の準備が必要です。

これからの生き方を見つけるために介護に携わる人と、介護に関心のある人と、地域に住む人とともに学びあい、語りあう場にしたいと願っています。

20年12月の「介護者の集い」のテーマは『頭と身体のリフレッシュ体操』です。疲れた心と身体を癒す為に、簡単に出来る事を考えてみました。皆様のご参加を呼びかけたいと思います。

日 時 : 平成20年12月19日(金)午後2時~4時  
場 所 : 特別養護老人ホームせいりょう園1階フロア

# 介護現場発信情報

～かけがえのないひととき～

## ユニット型特養

「ユニットについて」

元島 千弥

ユニットが始まってから1年あまりが経ちました。この1年はとても早く月日が過ぎたように思います。従来型からユニットへ移られた利用者の方や最初からユニットで新しく生活される方々もご自分のペースで生活されています。

また、ユニットは1、2、3丁目と分かれており、それぞれのユニットで違った雰囲気を感じられ、どのユニットも私は好きです。

1年間でユニットに対しての感じ方も変わりました。特に一人ひとりの個別ケアはとても難しいのと、利用者の方々の事をもっと知らないといけないと思いました。援助への工夫やアイデア、ご本人がどうしたら安心して暮らしていけるか、病気とどう向き合い、どのように生活していけるか、まだまだ私の知識では不足しがちでいつも先輩や主任に頼ってばかりでした。また、利用者の方々とのコミュニケーション、信頼関係、ご家族との関わりなども人に伝えて、聞いて理解する大切さも改めて実感しました。

後、医学の知識をもっと得ないといけないと思います。同じ病気を持っていても個人差が大きくあり、病気に対する姿勢も人それぞれ異なります。病気の状態にご本人の思いが向き合えておられない方の場合はとてもつらいものです。どちらに合わせても利用者の方への負担はかかります。出来るだけご本人の気持ちを大切にしてお側に寄り添っていけたらといつも思っています。

まだ、せりりょう園で働きだして経験としては浅いのですが、自分なりに努力して勤めていきたいです。

